



1月に入り初雪が降り、20センチ以上の積雪になり関東では交通手段が乱れ大変なことになり、翌朝のニュースをにぎわせていました。その後も最低温度が氷点下という日が続き、2月初めにまた雪のニュース、日本海側の大雪（三八豪雪を思わせる大雪）、本白根山の噴火と・・・今年は何かとお騒がせな日々が続いています。皆様の周りは如何でしょうか。

私は今年「本厄」になります（昭和33年生まれ 男性）。良い機会なので「厄年」を調べてみました。本厄・大厄とは？

一般的に厄年とは本厄のことを指しています。この本厄の前後1年ずつを前厄、後厄と呼び、合わせて3年間は災難に会いやすい時期としています（ここまでが私の知識でした）。

本厄のいわれの根拠はあるの？

42歳は「死に」に通じ、33歳「散々」とかけられるから、など様々な理由は挙げられていますが、いずれもこの年齢が、本厄にいわれるように悪いことが起きるといふ科学的な根拠はありません。しかし、科学的な根拠が無いにしても本厄のころの年代は肉体に変化が訪れたり、本人以外の家族や社会的な環境の変化も訪れやすい時期であるといえます。

私の場合は、社会的に立場が変化する時期であると言えます。「定年」という大きな区切りを迎える年になります。女性の場合は30代に2度厄年が訪れますが、これは気力・体力に満ちた20代を終え、子育てをする人が多く、体力がぐんと落ちやすい時期ともいえます。また、親が50代～60代に入り病气やけが重くなりやすい時期と言えます。男性の場合は25歳で社会人として、42歳で管理職として責任とプレッシャーがかかります。

厄年に振りかかる災害は本人だけに及ぶものではありません。家族にも影響が出る可能性はあります。また、健康問題だけでなく会社関係など公私にわたる問題が起きる可能性があることは、皆様もご存じの事と思います。

厄年という風習を信じなくても何か大きなトラブルが起きた時「厄年だったから・・・」と思うのも気分の良いものでもありません。信じない人も少しは厄年を意識して、健康に気を付けて、災いを回避される事をお勧めします。

医療用医薬品業界は今年、大きな変革をむかえる年になる予感がします。ジェネリック医薬品の数量シェア80%に向けた流れは加速し、厚労省は新規事業として「重点地域使用促進強化事業」を開始します。今年の4月から、「医療用医薬品流通関係者が厳守すべき流通改善に関する指針（ガイドライン）」について（以下、流通改善ガイドライン）が正式に施行されます。

業界の厄払いが必要かはわかりませんが、厄年の皆様は厄払いをして健康で楽しい年にして下さいませ。結果、業界に貢献することになります（お互い頑張りましょう）。

( I F )